

新聞4コマ漫画が描く菅直人首相（前編）

—首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2010～2011—

Prime Minister Naoto Kan in Newspaper Comic Strips (Part 1): An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2010-2011

水野剛也

Takeya MIZUNO

はじめに 本論文の概要

本論文は、菅直人首相の在任期間中（2010年6月8日～2011年9月2日）に3大全国紙（『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』）の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画（朝刊・夕刊とも）を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する試みである。

本号に掲載する前編では、論文の目的・方法・意義・構成を説明した上で、量的な側面から全体像を俯瞰する。

首相を描いた作品の質的分析は、本誌次号（第53巻・第1号）以降に掲載する予定の中編から開始する。中編では、『毎日新聞』の「アサッテ君」(朝刊)と「ウチの場合は」(夕刊)、そして『読売新聞』の「コボちゃん」(朝刊)を扱う。さらにそれ以降に掲載する予定の後編では、『朝日新聞』の「のちゃん」(朝刊)と「地球防衛家のヒトビト」(夕刊)を同じ方法で分析する。

最後の結論では、分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示するつもりである。

1 本論文の目的・方法・意義、および構成

政治・政治家を論評する上で、漫画は古くから主要な表現手段でありつづけてきた。政治漫画研究者の茨木正治によれば、政治漫画の嚆矢は、少なくとも15世紀末から16世紀のイギリスで発行された、宗教改革に関する1枚のパンフレットにさかのぼるといふ。¹

政治漫画は、そのときどきの政情を題材とするため時事性が強く、それゆえ日々の出来事を報道する新聞とともに発展してきた。たとえば、アメリカでは植民地時代から現在まで、程度の差はあれ、政治漫画は新聞報道に不可欠な要素でありつづけている。アメリカのジャーナリズム

界でもっとも権威があるとされるピューリツァー賞には、早くも1922年に政治風刺漫画 (Editorial Cartooning) 部門が設けられ、同部門は21世紀に入っても存続している。日本でも、新聞が誕生した幕末の黎明期から現在にいたるまで、新聞紙面のなかで漫画はつねに一定の地位を占めてきた。時代や国を越えて、政治・政治家と漫画、そして新聞は切っても切れない密接な関係にある。²

ところで、世界的に見ても独自性が強い日本の新聞4コマ漫画は、政治・政治家をどのように描いているのであろうか。上述のとおり、日本の新聞も創成期から積極的に漫画を掲載してきたが、なかでも4コマ漫画は他国の新聞漫画と比較してユニークな存在である。どのようなニュースが起きようとも、ほぼ毎日必ず最終社会面の左上隅 (『朝日新聞』では2013年4月1日号より第2社会面の右上隅に移動) に掲載される4コマ漫画は、日本のほとんどの一般紙にとって「そこになくてはならない」ものであり、多くの読者にとっては読む・見ることが習慣づけられた定番アイテムである。漫画史研究者の清水勲も指摘しているように、「日本の四コマ漫画は新聞を中心に発展してきた」。もちろん、影響力も広範にわたり、「手塚治虫をはじめとする戦後ストーリー漫画の基礎を作った漫画家たちは、みな新聞の4コマ漫画に基礎を置いている」と論じる研究者もいる。しかし、その歴史の深さ、また人気・認知度の高さにもかかわらず、新聞4コマ漫画の内容を実証的・体系的に分析した学術研究はきわめて少ない。その政治的内容に光をあてた研究は、なおさら少ない。³

本論文は、これまでほとんど研究対象とされてこなかった新聞4コマ漫画に目をむけ、かつ、そのなかで日本の最高政治指導者である内閣総理大臣 (以後、首相) がいかに描かれているかを分析することで、上述の疑問の一端を解明しようとする試みである。

より具体的には、菅直人首相の在任期間 (2010年6月8日～2011年9月2日=452日) を時間枠として、3大全国紙 (『毎日新聞』・『読売新聞』・『朝日新聞』) の社会面に掲載されたすべての4コマ漫画 (朝刊・夕刊とも) を精査し、そのなかから首相を描いている作品を網羅的に抽出し、それらが首相をどのように描いているかを主に質的に分析する。⁴

分析対象とした4コマ漫画の題名・作者名・掲載紙名は、以下のとおりである。*

- ・「アサッテ君」 東海林さだお 『毎日新聞』 (朝刊)[†]
- ・「ウチの場合は」 森下裕美 『毎日新聞』 (夕刊)
- ・「コボちゃん」 植田まさし 『読売新聞』 (朝刊)
- ・「ののちゃん」 いしいひさいち 『朝日新聞』 (朝刊)
- ・「地球防衛家のヒトビト」 しりあがり寿 『朝日新聞』 (夕刊)

* 『読売新聞』の夕刊では、菅首相の在任期間中、社会面の4コマ漫画は連載されていない。それ以前は、小泉純一郎首相の在任期間中の2004年7月2日号で終了するまで、38年間にわたり「サンワリ君」(鈴木義司) が連載されていた。なお、菅の退任から約1年1ヵ月後の2012年10月1日号からは「オフィス ケン太」(唐沢なをき) がスタートし、本論文掲載時点 (2015年3月) でも継続中である。

「アサッテ君」は2014年12月31日号で13,749回をもって最終回を迎えた。一般全国紙の4コマ漫画としては最多連載記録であった。その後継として、2015年2月1日号から「桜田です！」（いしかわじゅん）が連載を開始している。

分析対象を抽出する上でもっとも重要なのは、「首相を描いている作品」をいかに定義するかであるが、本論文はかなり狭義のそれを採用した。すなわち、「首相を描いている作品」を、次の2つの基準のいずれか、あるいは両方に合致するものに限定した。

- 1) 菅首相の身体、もしくはその一部を、首相本人であることを判別できる画像として描いている。
- 2) 「菅」・「首相」・「総理」・「かなおと」・「カン」など、文字により直接的に菅首相に言及している。

上述のような狭義の基準を採用した理由は、首相その人が作品の題材として描かれていることが疑いようのない事実として客観的に確認できるもののみを扱うことで、分析対象の抽出（同時に分析から得られる知見）の安定性・確実性を最優先させるためである。もちろん、間接的・示唆的、その他の方法で首相を描いている（と思われる）作品は存在するし、それらに分析価値がないというわけでは決してない。本論文でも、質的な分析をする際には、定義には合致しないものの首相と関連すると考えられる作品を補足的に分析に加える。しかし、類似した先行研究がきわめて限定されている現段階では、できるだけ狭義の定義を採用することで分析対象の抽出の精度を高め、可能なかぎり堅実な知見を示し、今後のさらなる研究につなげることが先決であると判断した。自民党の小泉純一郎、安倍晋三（第1次、以下略）・福田康夫、麻生太郎、および民主党の鳩山由紀夫首相を描いた4コマ漫画を分析した先行研究（後注3参照）も、ほぼ同じ定義を採用している。なお、これら一連の先行研究は本論文にとって最重要、かつ他に類のない比較材料であるため、随所で「先行研究」として参照・引用するが、頻繁に言及するためそのつど後注をつけたいことを断っておく。

分析にあたっては、これも先行研究にならい、マス・メディアのフレーム（枠組）概念にもとづく分析手法を援用する。ここでいうフレームとは、しばしば引用されるトッド・ギトリン（Todd Gitlin）の定義に従い、「言葉であるか画像であるかを問わず、シンボルの使い手が日常的に言説を構成する際に用いる、認知・解釈・表示の一貫したパターン、また選択・強調・排除の一貫したパターン」をさす。簡潔に言えば、媒体（新聞4コマ漫画）がどのような枠組・とらえ方・観点で対象（首相）を描いているかに着目する質的な分析手法である。ギトリンによれば、あらゆるジャーナリズム活動にとってフレームは不可避・不可欠な存在であり、ゆえにそれを分析するためにはフレームの構造を明らかにする必要がある。⁵

次に、本論文にはいくつか重要な意義があるが、主要なものとして以下の4点をあげる事が

できる。

第1に、新聞の政治漫画を分析した先行研究のほとんどが1コマ漫画のみを対象としてきたのに対し、本論文は4コマ漫画という未開拓に近い領域に踏み込む。既述のとおり、4コマ漫画は日本の新聞界、および漫画界で無視できない人気と地位を誇っている。藤森照信の言葉を借りれば、「マンガファンならずとももっとも多くの人が目を通していているのは新聞四コマ漫画にちがいない。日本のマンガの大通りというか広場にあたる」。にもかかわらず、その内容を学術的に分析しようとする努力はほとんどされてこなかった。たとえば、本論文の冒頭で触れた茨木正治は、政治漫画を理論的、かつ実証的に検討した日本では数少ない研究者の一人であるが、彼の一連の研究は1コマ漫画だけに焦点をあてている。⁶

関連して第2に、ただでさえ少ない新聞4コマ漫画の先行研究のなかでも、政治的な表現内容に着目してそれを実証的・体系的に分析する本論文のような試みは、なおさら希少である。その主因として、ある漫画研究者が指摘しているように、一般的に新聞4コマ漫画が「一種の清涼剤〔として〕読者に息抜きをさせる」ものとしか理解されていない点が考えられる。新聞4コマ漫画を質的に分析している若干の既存文献にしても、小泉から鳩山までの首相の描かれ方を解明した先行研究以外は、政治や政治指導者の描かれ方を研究対象としているわけではない。⁷

先行研究の希少性についてさらに付言すれば、本論文は自民党から政権を奪った民主党の2人目の首相を分析対象としている点で、そもそも少ない関連研究のなかでもことさらに希有な長を有している。民主党は2009年8月30日に執行された衆議院総選挙で躍進し、念願の政権交代を実現させた。民主党から輩出した初の首相である鳩山を引き継いだ菅の描かれ方を分析する本論文は、これまで主として自民党の首相（小泉・安倍・福田・麻生）を扱ってきた既存の研究に対して、有力な比較検討材料を提供することができる。もちろん、本論文により鳩山と菅との対比も可能となる。本論文を足がかりに菅の後継者で同じく民主党の野田佳彦、民主党から政権を奪い返した安倍晋三（第2次）、およびそれ以後の首相を取りあげる事例研究が進展すれば、政権交代が新聞4コマ漫画に与えた影響をより長い時間枠で究明することもできる。

なお、「サザエさん」（『夕刊フクニチ』・『新夕刊』を経て『朝日新聞』、長谷川町子）に関しては例外的に多くの作品論が存在するが、本論文のように政治指導者の描き方に注目しているわけではないし、その多くは学術研究というよりは大衆むけの教養・娯楽書である。既述の点とあわせ、本論文には、既存の新聞4コマ漫画研究が見落としてきた領域を新たに開拓する意義がある。⁸

第3に、本論文には政治的コミュニケーション学の観点からも重要な意義を見いだすことができる。画像と文字を組みあわせることのできる漫画表現には、受け手の政治認識に与える影響やジャーナリズムの権力監視・番犬機能という点で、無視できない特性がある。フェルドマン・オフエル（Feldman Ofer）は、「マンガは、現代国家において、政治的コミュニケーションの重要な役割を担っている。これは読者に昨今の政治社会状況を知らしめると同時に、その状況を雄弁に解説し、国内外の事態についての理解に役立っている」と指摘している。前述の茨木も、政治を扱うことで

漫画は「読み手である一般庶民に情報を提供し、あわせて政治権力をつかさどる様子を批判的に表して……政治における認識と態度を形成する一助となる」と論じている。漫画を研究対象としている論者はばかりではない。アメリカ史研究者の金澤宏明も、「民衆に対して政治意識を流布し、賛同あるいは批判を促す媒体」としての政治漫画の史的価値を評価している。政治認識を形成する機能や権力監視・番犬機能が1コマ漫画だけに認められて、新聞4コマ漫画に認められないと考える根拠はない。本論文は、新聞4コマ漫画の政治的コミュニケーションとしての機能・性質の理解にも貢献することができる。⁹

第4に、菅の任期中の2011年3月11日には、東日本大震災、および東京電力福島第一原子力発電所事故が発生しており、この歴史的な大災害が新聞4コマ漫画の政治的表現にどのような影響や変化を及ぼしたかを考察できるという点でも、本論文には他に類のない独自性がある。もっとも、4コマ漫画で大震災がどう描かれたかという問題は本論文の主題を超越する課題であり、その本格的な解明には別個の研究を要する。しかし、4コマ漫画に表出する国家の政治的最高指導者像は、東日本大震災のような世界規模の災害と無関係ではありえない。この点とはとくに中編以降でより具体的に指摘するが、新聞4コマ漫画のジャーナリズムとしての機能そのものを理解する上でも、歴史的な危機に見舞われた菅の任期中の作品分析には先行研究にはない刮目すべき意義がある。

本論文の構成についても説明しておく。まず、次項「2 量的な側面から見た全体的な傾向」では、分析期間から抽出した作品群を集計し、量的な側面から全体的な傾向を把握する。それをふまえて、「3 新聞4コマ漫画が描く菅首相」で作品の質的な内容分析をおこなう。最後の「4 結論 分析・知見の総括」では、それまでに得た分析・知見を総括し、先行研究とも比較しながら今後の課題などを提示し、さらに新聞4コマ漫画の権力監視・番犬機能などについて全体を通して得られる若干の考察を示す。

紙幅制限のため、本論文は前編・中編・後編・結論にわけ、必要に応じてさらに各部を分割して掲載する予定である。本号掲載の前編では、「2 量的な側面から見た全体的な傾向」までをまとめる。本誌次号（第53巻・第1号）以降に掲載する予定の中編では、『毎日新聞』の「アサツテ君」（朝刊）と「ウチの場合は」（夕刊）、そして『読売新聞』の「コボちゃん」（朝刊）の質的内容分析をおこなうつもりである。後編では、『朝日新聞』の「ののちゃん」（朝刊）と「地球防衛家のヒトビト」（夕刊）を同じ方法で分析する。結論では、分析・知見を総括し、今後の研究課題や全体を通して得られる考察を提示するつもりである。

最後に、本論文中で言及する人物の役職等はすべて当時のもので、敬称は省略している。

2 量的な側面から見た全体的な傾向

本項では、本論文の主目的である質的な内容分析をおこなう前段階として、菅首相を描いた新聞4コマ漫画を量的な側面から見ることで、その全体像を俯瞰する。

知見・分析の記述に移る前に、量的なアプローチをとる本項では、前述した「首相を描いている作品」の定義に合致しない作品や在任期間外に掲載された作品は、すべて除外してあることを断っておく。量的な手法を採用するがゆえに、明確な基準で取捨選択をする必要があるからである。もちろん、厳密には定義に合致しなくても、あるいは在任期間外であっても、本論文の趣旨に照らして参照すべき作品はある。それらは、質的な分析をする次項(本誌次号以降に掲載する予定の中編・後編)で補足的に扱う。

まず、もっとも基本的な作業として、菅首相の在任期間中(2010年6月8日～2011年9月2日)、各4コマ漫画がどのくらいの頻度(割合のこと、以後「頻度」で統一。小数点以下第3桁は切り捨て)と本数で首相を登場させたかを調べたところ、表1のような結果が得られた。表2は、菅とそれ以前の首相を比較するために、表1と先行研究の数値を統合したものである。

3大紙の4コマ漫画の全体的な特徴として、表1と表2から少なくとも2つの重要な点を指摘することができる。第1の点は先行研究が示している知見と重複するが、第2の点は菅の在任期

表1 菅首相を描いた作品の頻度と本数(漫画別)

「アサッテ君」(東海林さだお)	『毎日新聞』(朝刊)	1.56% (384本中6本)
「ウチの場合は」(森下裕美)	『毎日新聞』(夕刊)	0.00% (339本中0本)
「コボちゃん」(植田まさし)	『読売新聞』(朝刊)	0.00% (441本中0本)
「ののちゃん」(いしいひさいち)	『朝日新聞』(朝刊)	0.00% (441本中0本)
「地球防衛家のヒトビト」(しりあがり寿)	『朝日新聞』(夕刊)	4.89% (368本中18本)
合計		1.21% (1,973本中24本)

表2 小泉から菅までの首相を描いた作品の頻度と本数(漫画別)

	小泉*	安倍	福田	麻生	鳩山	菅
「アサッテ君」	0.87% (1,825本中16本)	2.37% (337本中8本)	0.59% (335本中2本)	2.38% (335本中8本)	2.70% (259本中7本)	1.56% (384本中6本)
「ウチの場合は」	0.00% (1,318本中0本)	0.40% (245本中1本)	0.00% (280本中0本)	0.00% (275本中0本)	0.00% (209本中0本)	0.00% (339本中0本)
「コボちゃん」	0.05% (1,922本中1本)	0.00% (356本中0本)	0.28% (355本中1本)	0.00% (347本中0本)	0.00% (259本中0本)	0.00% (441本中0本)
「ののちゃん」	0.20% (1,927本中4本)	0.00% (354本中0本)	0.00% (355本中0本)	0.00% (348本中0本)	0.61% (163本中1本)	0.00% (441本中0本)
「地球防衛家のヒトビト」	3.10% (1,320本中41本)	3.72% (295本中11本)	2.72% (294本中8本)	4.86% (288本中14本)	5.31% (207本中11本)	4.89% (368本中18本)

*小泉は表中にある5つの漫画以外に、「まっぴら君」(『毎日新聞』夕刊)、「サンワリ君」(『読売新聞』夕刊)、「ワガハイ」(『朝日新聞』夕刊)でも描かれている。作品の詳細な分析は先行研究(後注3参照)がおこなわれている。

間中に見られる比較的固有の特徴である。

第1に、先行研究がくり返し指摘しているように、首相を描く漫画と描かない漫画との間に大きなへだたりがある。小泉から麻生までの自民党の4人の首相、および民主党の鳩山も、先行研究が「時事的4コマ漫画」と特徴づけた「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」では一定の頻度・本数で描かれていた。対照的に、「家庭的4コマ漫画」である「ウチの場合は」・「コボちゃん」・「ののちゃん」では、ほとんど描かれていなかった。この特徴は、菅が首相に就任してからもまったく変わっていない。それどころか、菅は3つの家庭漫画には1度も登場しておらず、描く漫画と描かない漫画が完全に分離している。先行研究が見いだした両者間の大きな差異は、政権与党が自民党から民主党に移ってからも、また巨大な災害が発生してからも、いささかも縮まっていない。どの政党の誰が首相であるか、また国・社会がどのような危機・困難に直面しているかを問わず、首相を描く・描かないという点で各漫画の特徴は固定的であることがわかる。ただし、後述するように大震災後「アサッテ君」が首相を1度も描いていない点には留意すべきである。

第2に、同じ民主党の首相でも、菅は鳩山に比べ描かれる頻度が低く、また自民党の4人の前任者たちと比べてもいちじるしく高いわけではなく、全体では中間的な位置にある。在任期間が異なるため頻度のみを比較すると、小泉=0.83%、安倍=1.26%、福田=0.67%、麻生=1.38%、鳩山=1.73%に対し、菅は1.21%で、安倍よりも若干低いほぼ同じである。同じ民主党の首相ではあるが、小泉以来の首相のなかで最高値を記録した鳩山よりも後退している。頻度を基準に「描かれやすさ」を順位づけると、鳩山(1.73%)>麻生(1.38%)>安倍(1.26%)>菅(1.21%)>小泉(0.83%)>福田(0.67%)となり、菅は安倍とともに中間に位置している。

菅の頻度が中間的な順位となった要因として、先行研究が「世論反映型」の時事漫画と特徴づけた「アサッテ君」でさほど多く描かれなかった事実を看過することはできない。菅を描いているのは時事性の強い「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」だけである。しかし、表3が示すように、菅は「自己主張型」の「地球防衛家のヒトビト」では鳩山に次いで高い頻度(4.89%)で描かれているのに対し、「世論反映型」の「アサッテ君」では1.56%にすぎず、最高値(2.70%)の鳩山はもちろん2%を超えた麻生・安倍に及ばない。「アサッテ君」においては必ずしも「描かれやすい」首相でなかったことが、菅の頻度を押し下げたといえる。

さらにいえば、表3の「頻度の差」が示すように、「描きやすさ」という点で「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」の差がもっとも大きいのが菅である。このことは、2つの時事漫画で描

表3 「時事的4コマ漫画」(「アサッテ君」・「地球防衛家のヒトビト」)における首相を描いた作品の頻度とその差(首相別)

	鳩山	麻生	安倍	菅	小泉	福田
「アサッテ君」	2.70%	2.38%	2.37%	1.56%	0.87%	0.59%
「地球防衛家のヒトビト」	5.31%	4.86%	3.72%	4.89%	3.10%	2.72%
頻度の差	2.61	2.48	1.35	3.33	2.23	2.13

かれる頻度の順位が、小泉から鳩山までの5人はまったく同一であったにもかかわらず、菅では一致していない事実からもわかる。「描きやすさ」という点で、こと菅については両漫画間でこれまでになく大きな差異が生じているのである。

菅を描くことについて「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」で差が広がった要因の1つとして、2011年3月11日に発生した東日本大震災の影響が考えられる。後述するように(表8参照)、「アサッテ君」は大震災以降、まったく首相を描いていない。他方、「地球防衛家のヒトビト」は7本の作品(2011年3月の2本は震災前)に首相を登場させている。この点については、本論文中編・後編で両漫画を質的に分析する際にもあらためて言及する。

なお、前述のとおり菅は家庭的4コマ漫画では1度も描かれていないが、表4を見れば明らかのように、そのこと自体は他の首相と大きく変わらない。首相が家庭漫画に登場することはほとんどない、という共通の土壤に根ざした相対的に軽微な差異だといえる。

次に、菅のデータを新聞別、朝・夕刊別に集計したところ、表5と表6のような結果が得られた。

これらの結果も先行研究のそれと本質的に同じで、新聞別では頻度の高い順に『朝日新聞』>『毎日新聞』>『読売新聞』(『読売新聞』は0%)となり、また朝刊よりも夕刊の漫画がより頻繁に首相を描いている。この順位は小泉首相以降、まったく変わっていない。ただし、前述のとおり、菅を描いている作品は時事的な性格が強い「アサッテ君」と「地球防衛家のヒトビト」だけであるため、新聞別、朝・夕刊別による差はいずれも両漫画の数値をほぼそのまま反映しているにすぎない。首相を描く漫画と描かない漫画が完全に分離しているだけに、新聞別、朝・夕刊別の比較だけを見て

表4 「家庭的4コマ漫画」(「ウチの場合は」・「コボちゃん」・「ののちゃん」)における首相を描いた作品の頻度と本数(首相別)

小泉	0.09% (5,440本中5本)*
安倍	0.10% (955本中1本)
福田	0.10% (990本中1本)
麻生	0.00% (970本中0本)
鳩山	0.15% (631本中1本)
菅	0.00% (1,221本中0本)

* 小泉の在任期間中に連載されていた「ワガハイ」(『朝日新聞』夕刊)の数値を含む。

表5 菅首相を描いた作品の頻度と本数(新聞別)

『毎日新聞』	0.82% (723本中6本)
『読売新聞』	0.00% (441本中0本)
『朝日新聞』	2.22% (809本中18本)

表6 菅首相を描いた作品の頻度と本数(朝・夕刊別)

朝刊	0.47% (1,266本中6本)
夕刊	2.54% (707本中18本)

解釈を加えることには慎重にならざるをえない。だからこそ、異なる漫画を横断的にまとめて全体的な傾向を把握する一方で、漫画ごとにその特質や傾向を詳しく検討する作業が重要となる。本論文が質的分析に主軸を置くのはそのためである。また、菅の在任期間中、『読売新聞』の夕刊社会面には4コマ漫画が連載されていないことにも留意しておくべきである。¹⁰

次に、内閣の平均支持率と首相を描いた作品数を、在任期間を前半と後半にわけて比較したところ、表7のような結果が得られた。2010年6月8日から2011年9月2日までが在任期間であるから、前半は2010年6月から同年12月まで、後半は2011年1月から同年8月までとした。菅内閣は2011年8月30日に総辞職しているため（ただし9月2日まで職務執行内閣として存続）、2011年9月の内閣支持率を示す世論調査（朝日新聞社）はおこなわれていない。

支持率が比較的に高い前半（39.5%）が13本、低い後半（20.6%）が11本とほぼ均等に割れており、支持率の高低には大きく左右されず比較的にまんべんなく描かれていることがわかる。この特徴を歴代の首相と比較すると、描かれる時期に偏りがあった小泉・安倍・福田よりも、大きな偏りなく均等に描かれた麻生と鳩山に近い。とくに麻生との類似性が際立つ。

まず、小泉はまれに見る高支持率を維持した就任初年にもっとも多く描かれたが、この特徴は菅にはさほどあてはまらない。確かに、任期中の最高値である55%を記録した2010年9月に4本で描かれているが、突出して多いわけではないし、54%から支持を得ていた就任当初の2010年6月には1本しかない。また、支持率を失っていく過程でも菅は一定の頻度で作品に登場しつづけている。なお、小泉は就任の翌年以降も一定数の作品で描かれており、在任期間の長さで4倍以上の開き（小泉は2001年4月26日～2006年9月26日＝1,980日）があるものの、この点では平均的に描かれた菅と類似性がないわけではない。

安倍と福田の場合、支持率が低下した後半の本数が前半のそれを大きく上回っており、この点で菅とはっきり異なる。安倍と福田は突然の辞任表明後に描かれる機会が急増しているが、この特徴も菅には見られない（菅が民主党の党首、および首相の辞任を正式に表明したのは2011年8月26日）。ただし、菅が後半に少なく描かれたというわけではけっしてないし、安倍・福田と共通する点として、辞任を題材にした作品が複数あること（「地球防衛家のヒトビト」、内容は後編で詳説）にも留意すべきである。さらに、後半の2011年3月に東日本大震災と福島原発事故が発生したことも考慮に入れておく必要がある。

歴代の首相で菅ともっともよく似ているのが麻生である。先行研究が指摘しているように、「麻生は在任期間中を通じて偏りなく分散して」描かれており、さらに、支持率が比較的に高い前半に

表7 菅内閣の平均支持率と首相を描いた作品数*

	平均支持率	本数
前半（2010年6月～12月）	39.5%	13本
後半（2011年1月～8月）	20.6%	11本

*前半・後半の平均支持率は、表8の月別の支持率から算出した（小数点以下第2桁は切り捨て）。

やや多く描かれている（前半 [30.3%]=12本、後半 [20.8%]=10本）点でも、菅と酷似している。

なお、鳩山も麻生・菅と同じく在任期間を通じて平均的に作品に登場しているが、後半に若干多く描かれている点がやや異なる。すなわち、政権交代をなし遂げ高支持率を誇った前半（57.6%）は9本で描かれているのに対し、支持率が低下・低迷した後半（28.4%）は10本と微増している。

あえて大まかに分類すれば、どちらかといえば「前半型」の小泉に対し、安倍と福田は明らかに「後半型」、そして麻生・鳩山・菅は起伏の少ない「安定分散型」と特徴づけられる。

より詳しく分析するために内閣支持率と作品数を月ごとに集計しても、基本的に同じ知見が得られる。表8がその結果である。

首相に就任以来、支持率が低下していくなか比較的にまんべんなく描かれている点で、やはり麻生・鳩山との類似性が目につく。ただし、既述のとおり、2011年3月の大震災以降、「アサッテ君」では1度も描かれていない。このことが、菅が麻生・鳩山ほど「描かれやすい」首相にならなかった要因の1つであると考えられる。

ところで、先行研究が示した仮説——首相が描かれる多寡に影響を与えるのは支持率の数字そのものよりも、どれだけ社会の注目を浴びているかである——の妥当性については、こと菅に限って

表8 菅内閣の平均支持率と首相を描いた作品数（月別）*

	支持率	合計	「アサッテ君」	「地球防衛家のヒトビト」
2010年6月	54%	1	1	0
7月	38%	1	0	1
8月	37%	1	0	1
9月	55%	4	1	3
10月	45%	1	1	0
11月	27%	3	1	2
12月	21%	2	0	2
2011年1月	26%	0	0	0
2月	20%	2	2	0
3月	18%	2	0	2
4月	21%	0	0	0
5月	26%	0	0	0
6月	25%	4	0	4
7月	15%	2	0	2
8月	14%	0	0	0
9月		1	0	1
		24	6	18

*内閣の月別の支持率は朝日新聞社の世論調査（朝日RDD方式、定例・緊急）から算出した。同じ月に複数回の調査が実施されている2010年6月・7月・9月、および2011年6月は、その平均値を算出（小数点以下は切り捨て）した。なお、菅内閣は2011年8月30日に総辞職しているため（ただし9月2日まで職務執行内閣として存続）、2011年9月の内閣支持率を示す世論調査（朝日新聞社）はおこなわれていない。

は判断がつきにくい。在任期間中に発生した東日本大震災、および福島第一原発事故というあまりに特異な事象が、仮説に関する合理的な解釈をさまたげるからである。たとえば、大震災は一国の最高政治指導者である首相への注目度を飛躍的に高めたはずであり、にもかかわらず「描かれやすさ」につながらなかったということは、仮説は菅に対しては有効でないと考えられることができる。しかし他方で、大震災はその激烈さ、甚大さゆえに首相個人に対する注目度をむしろ希薄化・分散化させたのであり、菅の「描かれやすさ」が中位である事実により、仮説は依然として妥当性を維持している、と見ることもできる。あるいは、大震災にともなう首相への社会的注目度は、首相自身の主体的な言動により喚起されたというよりは、自然災害という外的要因を契機として偶発的に高まったものであり、必ずしも仮説を揺るがすものではない、と考えることもできる。

いずれにせよ、大震災があまりに例外的な事象であるがゆえに、菅の分析だけをもってして先行研究が支持してきた仮説を破棄、もしくは修正することはできない。首相の「描かれやすさ」と内閣支持率や社会的注目度との関係を理論化するには、量的・質的の両面から、本論文を含めてさらに研究を積みかさねることが必須である。

最後に、菅を示すシンボル（画像・文字・画像と文字）を漫画ごとに分類し集計したのが表9、各シンボルの合計値を他の首相のそれと比べたのが表10である。

一見して、菅を描いた作品では文字が多用されていることがわかる。「文字のみ」(9本)が「画像のみ」(3本)よりも多いのは、菅以外では小泉だけである（福田は同数）。漫画という表現形態

表9 菅首相を示すシンボル（漫画別）

	画像のみ	文字のみ	画像と文字（併用）
「アサッテ君」	1本	2本	3本
「ウチの場合は」	0本	0本	0本
「コボちゃん」	0本	0本	0本
「ののちゃん」	0本	0本	0本
「地球防衛家のヒトビト」	2本	7本	9本
合計	3本	9本	12本

表10 各シンボルの合計値（首相別）

	画像のみ	文字のみ	画像と文字（併用）
小泉	27本	39本	14本
安倍	8本	5本	7本
福田	3本	3本	5本
麻生	7本	5本	10本
鳩山	11本	3本	5本
菅	3本	9本	12本
合計	59本	64本	53本

を考えると、文字の使用が画像を上回った背景には、菅の外見が画像として描きにくい、漫画化に適した身体的特徴に乏しいなど、この首相だけが有する何らかの特殊な要因が働いている可能性がある。安倍が突然に辞意を表明した直後、「地球防衛家のヒトビト」の作者・しりあがり寿は、作品中（2007年9月15日号）に自身とおぼしき「某漫画家」を登場させ、次は「似顔絵の描きやすい首相がいいよ～」と語らせたことがある。この発言に照らせば、菅は「似顔絵を描きにくい」首相だったのかもしれない。もっとも、漫画家から見た画像としての首相の「描きやすさ（にくさ）」は、すぐれて主観的な要素であるため、少なくとも本論文だけでは実証的に突きとめることのできない問題である。¹¹

ただし、かといって画像の使用が極端に少ないわけではなく、新聞4コマ漫画のシンボル使用についてはいまだ手堅い知見を見いだしにくいのが現状である。菅を画像だけで描いた作品は3本しかないが、文字と画像を併用している12本を足せば、実に15本の作品で画像が使われている。全体の24本中、過半数を占める。けっして画像の役割が小さいわけではない。

また、先行研究が指摘しているように、4コマ漫画では政治家本人が主人公になりにくいいため文字により説明的に首相を描く必要性が高まる、と解釈することも十分に可能である。実際、小泉から菅までの数値を合計すれば、表10が示すように、むしろ文字が画像を若干上回っている（画像のみ=59本、文字のみ=64本、併用=53本）。漫画であるがゆえ画像が多用されても何ら不思議ではないが、同時に4コマ漫画だからこその形態の漫画に比べ文字が大きな役割をはたしているともいえるのである。いずれにせよ、容姿など外見的・身体的な描きやすさ（にくさ）も含め、シンボル使用についてより蓋然性の高い知見を得るには追加的な研究を要する。

注

- 1 茨木正治『メディアのなかのマンガ 新聞一コママンガの世界』（臨川書店、2007年）、16。
- 2 新聞漫画を含め、アメリカ・ジャーナリズム史を要領よく概説した研究書として、Edwin Emery and Michael Emery with Nancy L. Roberts, *The Press and America: An Interpretive History of the Mass Media* 9th ed., (Needham Heights, MA: Allyn and Bacon, 2000) がある。日本における新聞漫画の歴史を概説した主要な文献としては、川崎市市民ミュージアム編『日本の漫画300年』（川崎市市民ミュージアム、1996年）、清水勲『図解 漫画の歴史』（河出書房新社、1999年）、ニュースパーク（日本新聞博物館）編・春原昭彦監修『新聞漫画の眼 人 政治 社会』（ニュースパーク、2003年）、清水勲『四コマ漫画 北斎から「萌え」まで』（岩波新書、2009年）、などがある。
- 3 清水勲『四コマ漫画 北斎から「萌え」まで』（岩波新書、2009年）、180、徐園『日本における新聞連載子ども漫画の戦前史』（日本橋報社、2013年）、6。新聞4コマ漫画の政治的内容を学術的な方法で検討した数少ない先行研究として、小泉純一郎、安倍晋三・福田康夫、麻生太郎、および鳩山由紀夫首相を事例とした一連の論文がある。小泉に関する論文は、新庄彩子・水野剛也ほか「新聞4コマ漫画が描く小泉劇場 小泉純一郎首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2001～2006（前編）」『情報研究』第37号（2007年7月）：47～84、新庄彩子・水野剛也ほか「新聞4コマ漫画が描く小泉劇場 小泉純一郎首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2001～2006（後編）」『情報研究』第38号（2008年1月）：23～58、である。なお、水野剛也「漫画のなかの小泉純一郎首相 首相在任期間中の『朝日新聞』4コマ漫画を中心として」『朝日総研レポート（A I R 21）』第206号（2007年7月）：16～53は、上述の論文から『朝日新聞』の4コマ漫画の分析部分を抜粋したダイジェスト版である。安倍・福田に関する論文は、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（前編） 両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2006～2008」『社会学部紀要』第47巻・第1号（2010年1月）：

5～13、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（中編） 両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2006～2008」『社会学部紀要』第47巻・第2号（2010年3月）：21～34、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相（後編） 両首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2006～2008」『社会学部紀要』第48巻・第1号（2010年12月）：61～78、である。

麻生に関する論文は、水野剛也・福田朋実ほか「新聞4コマ漫画が描く麻生太郎首相（前編） 首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2008～2009」『社会学部紀要』第48巻・第2号（2011年3月）：19～28、水野剛也・福田朋実ほか「新聞4コマ漫画が描く麻生太郎首相（中編） 首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2008～2009」『社会学部紀要』第49巻・第1号（2012年1月）：57～81、水野剛也・福田朋実ほか「新聞4コマ漫画が描く麻生太郎首相（後編） 首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2008～2009」『社会学部紀要』第49巻・第2号（2012年3月）：59～83、である。

鳩山に関する論文は、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相（前編） 首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009～2010」『社会学部紀要』第50巻・第1号（2012年12月）：21～35、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相（中編） 首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009～2010」『社会学部紀要』第50巻・第2号（2013年3月）：19-36、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相（後編-1） 首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009～2010」『社会学部紀要』第51巻・第1号（2014年1月）：5～12、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相（後編-2） 首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009～2010」『社会学部紀要』第51巻・第2号（2014年3月）：5～21、水野剛也・福田朋実「新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相（結論） 首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009～2010」『社会学部紀要』第52巻・第1号（2014年11月）：33～45、である。

- 4 菅首相は2011年8月26日に正式に辞意を表明し、8月29日の民主党代表選で野田佳彦財務大臣が当選したことを受け8月30日に総辞職し、同日、野田は衆参両議院で第95代首相に指名されている。しかし、野田が天皇による認証式を受け、正式に内閣を発足させたのは9月2日である。このため、菅内閣は総辞職した8月30日から9月2日まで「職務執行内閣」としてとどまっている。
- 5 Todd Gitlin, *The Whole World is Watching: Mass Media in the Making and Unmaking of the New Left* (Berkeley and Los Angeles, CA: University of California Press, 1980), 7. フレーム概念を政治漫画分析に関連づけて概説した先行研究として、茨木正治『「政治漫画」の政治分析』（芦書房、1997年）、茨木正治「政治漫画に見る内閣 選挙報道における森喜朗内閣と小泉純一郎内閣」『北陸法學』第9巻・第2号（2001年）：29～50、などがある。ニュースのフレームについては、Gaye Tuchman, *Making News: A Study in the Construction of Reality* (New York: Free Press, 1978) なども参考になる。他方、フレームはその定義や使い方が多種多様で、別言すれば統一性がないという問題もある。この点については、Robert M. Entman, "Framing: Toward Clarification of a Fractured Paradigm," *Journal of Communication* Vol.43, No.4 (Autumn 1993): 51-58、竹下俊郎「議題設定とフレーミング 属性型議題設定の2つの次元」『三田社会学』第12号（2007年）：4～18、などが要領よく整理をしている。
- 6 藤森照信「今週の本棚 紙面左上に君臨する『政権』の起承転結」『毎日新聞』2009年11月15日。もちろん、新聞の1コマ漫画はまさに政治・政治家を批評・風刺することを主目的としており、それゆえに先行研究が1コマ漫画を優先してきたことには十分な根拠がある。
- 7 山口佐栄子「4コマ漫画」、夏目房之助・竹内オサム編・著『マンガ学入門』（ミネルヴァ書房、2009年）、8。新聞4コマ漫画を質的に分析している文献として、次のようなものがある。高坂文雄『笑う戦後史』（トランスビュー、2002年）、岩本茂樹『戦後アメリカニゼーションの原風景 『ブロンディ』と投影されたアメリカ像』（ハーベスト社、2002年）、岩本茂樹『憧れのブロンディ 戦後日本のアメリカニゼーション』（新曜社、2007年）、岩本茂樹『アメリカ漫画『ブロンディ』へのまなざし 『夫の家事労働』をめぐって』『メディア・コミュニケーション』第58号（2008年3月）：43～53。
- 8 長谷川町子の「サザエさん」は、1946年4月に『夕刊フクニチ』で連載を開始し、『新夕刊』を経て1949年12月から『朝日新聞』（夕刊）、1951年4月から1974年2月まで『朝日新聞』（朝刊）で連載された4コマ漫画であるが、新聞にとどまらず、映画・ラジオ・アニメ・テレビドラマなど、さまざまなメディアを通して広く親しまれた。そのためか、「サザエさん」を論じた文献は他の漫画のそれに比べて格段に多い。主要な文献として、次のようなものがある。東京サザエさん学会編『磯野家の謎』（飛鳥新社、1992年）、樋口恵子『サザエさんからいじわるばあさんへ 女・子どもの生活史』（ドメス出版、1993年）、新藤謙『サザエさんとその時代』（晩聲社、1996年）、清水勲『サザエさんの正体』（平凡社、1997年）、清水勲『古きよきサザエさんの世界』（いそっぷ社、2002年）、朝日新聞be編集

- 部編『サザエさんをさがして』(朝日新聞社、2005年)、朝日新聞be編集グループ編『サザエさんをさがして その2』(朝日新聞社、2006年)、鶴見俊輔・齋藤愼爾編『サザエさんの〈昭和〉』(柏書房、2006年)、朝日新聞be編集グループ編『またまたサザエさんをさがして』(朝日新聞社、2007年)、朝日新聞be編集グループ編『サザエさんパンダを見に行く サザエさんをさがして その4』(朝日新聞社、2009年)、朝日新聞be編集グループ編『原っぱで夕焼けを見ていた頃 サザエさんをさがして その5』(朝日新聞社、2010年)、清水勲『サザエさん事典』(いそっぷ社、2013年)。
- 9 フェルドマン・オフエル「政治マンガに見る『日本の首相』」『潮』1993年12月号：120、茨木『「政治漫画」の政治分析』190、金澤宏明「史料としての合衆国の政治カートゥーン アメリカ対外関係史研究と図像分析」『アメリカ史研究』第32号(2009年)：126。
- 10 ただし、『読売新聞』の夕刊社会面には、昔の後任の野田佳彦の任期中である2012年10月1日号から「オフィスケン太」(唐沢なをき)が連載を開始し、本論文掲載時点(2015年3月)でも継続中である。
- 11 2007年9月15日号の「地球防衛家のヒトビト」の作品分析は、後注3で示した水野・福田「新聞4コマ漫画が描く安倍晋三・福田康夫首相(後編)」でおこなっている。

【Abstract】

Prime Minister Naoto Kan in Newspaper Comic Strips (Part 1) : An Analysis of Comic Strips in the Three Major National Newspapers in Japan 2010-2011

Takeya MIZUNO

This research attempts to analyze qualitatively (and partly quantitatively) how comic strips of the three major national newspapers in Japan, *Mainichi*, *Yomiuri*, and *Asahi*, both in morning and in evening editions, portrayed Prime Minister Naoto Kan during his tenure, from June 8, 2010 to September 2, 2011.

As the first installment of a multiple-part series, this article (Part 1) explains the purpose, method, and significance of the research, and then highlights quantitative findings.

In the following installments which are planned to appear in upcoming issues, comic strips of *Mainichi*, *Yomiuri* and *Asahi* will be analyzed qualitatively, and conclusions will be presented.